

序論)

前回の箇所は、エルサレムに対する預言で、彼らが自分たちの武器や二重の城壁、貯水池に頼っていましたが、それはムダであり、【主】が悔い改めに導こうとしているのにその導きを受け取らず、この世の楽しみを求めるようなことをしていたエルサレムに対して、「その咎は赦されることはない。」と神様に宣言されていた箇所を見ました。

この世の力にたより、自分たちの弱点の改善し、そして、現実的な対策をねっていたとしても、【主】により頼まず、【主】からの悔い改めのメッセージを受け取ることをしないのならば、それは赦されない咎となってしまいことでした。

今日の箇所は、エルサレムという町や、イスラエルという国に対しての預言というよりは、二人の人物に対する預言となっています。とはいっても、神様は、この二人だけに預言を伝えたかったわけではなく、この二人への預言を通して、私達の個人的な生き方に対するメッセージを投げかけておられるのだと思います。

【主】からのメッセージを受け取っていきましょう。

今日の箇所はそれほど難しくありません。

シェブナという私達にとっては反面教師となる人物に対する預言と、エルヤキムという私達が習うべき人物についていたの預言。そして、最後そのエルヤキムさえも折られるという不思議な預言によって今日の箇所は成り立っています。

一つずつ見ていきましょう。

★反面教師シェブナ

まずは、反面教師シェブナについてです。彼はどうやら南ユダ王国の歴史の中でも、良い王様として有名なヒゼキヤ王の時代の重鎮で、最初、15節にあるように宮廷をつかさどる。宮廷長官もしくは宰相的な地位にいた人のようです。

**22:15** 万軍の【神】、主はこう言われる。「さあ、宮廷をつかさどるあの執事シェブナのところに行け。

このシェブナとこの後にでてくるエルヤキムは、ここ以外、イザヤ書の 36 章や 37 章。そして、第二列王記 18 章にもでてくる人物で、それらの箇所では、エルヤ

キムが宮廷長官、シェブナは書記として書かれています。恐らく最初、宮廷長官だったのはシェブナだったのですが、【主】がエルヤキムを召されたことによりシェブナは書記に落とされ、そして、エルヤキムが変わりに宮廷長官になったと思われます。これはシェブナよりもエルヤキムの方が【主】のみ心にかなったということですが、シェブナを襲った悲劇や、宮廷長官ではなくなっただけではありませんでした。今日の箇所は、シェブナが異国の地に投げ捨てられて死ぬことになると預言されています。なぜシェブナはそうに神様に裁かれなければならなかったのでしょうか。

シェブナが裁かれる理由は 16 節をみればわかります。

**22:16** 『あなたは自分のために、ここに墓を掘った。ここはあなたに何の関わりがあるのか。ここはあなたのだれに関わりがあるのか。高いところに自分の墓を掘ったり、岩に自分の住まいを刻んだりして。

シェブナが活躍していた時代は、先程もいいましたがヒゼキヤ王の時代で、その時、南ユダ王国全体はアッシリアに包囲され、滅ぼされてしまいそうな危機的な時代でした。ところが、そのように危機的状況であったにもかかわらず、シェブナは、恐らく南ユダ王国全体を見渡せる山の上の一等地に自分のためのお墓を作ったのです。当時、そのような立派な墓は時の権力者、ダビデの家系である王たちだけが作ることを許されていました。恐らくシェブナは、王様にしかお墓を作ることができないような高台の一等地に豪華な自分のためのお墓を作って、自分の権勢を誇ろうとしていたのかもしれませんが。

本来ならば、南ユダ王国が残るか、滅びるかの瀬戸際だったような時代だったにも関わらず、彼は自分の立場や、自分の偉さ、自分の権威をこの世に現すことに意識を向けていたのです。神様はそんなシェブナに対して 17 節から 19 節のように言われています。

**22:17** ああ、勇者よ。【主】はあなたを遠くに投げやる。あなたをわしづかみにし、

**22:18** あなたをまりのように丸めて、広々とした地に投げ捨てる。そこであなたは死ぬ。そこであなたの誇る戦車も。あなたの主人の家の恥さらしよ。

**22:19** わたしがあなたをその立場から追放する。あなたは自分の地位から引き降ろされる。

17節では「ああ、勇者よ」と呼びかけられていますが、これはシェブナのことはありません。シェブナは宮廷長官だったので戦場に勇者としてでかけていったりはしませんでした。この「勇者」とは、勇者のような圧倒的な力をもってシェブナを裁こうとしている神様ご自身のことを指しています。

最も偉大な勇者である神様は、シェブナの頭を鷲掴にし、まりのように丸めて、広々とした地、つまり異邦人であるアッシリアの地で死ぬようにされるのです。

そして、シェブナは、自分が仕えている王・ヒゼキヤ王の恥として後世に名前が残るようにされてしまいます。

みなさん、私達が危機的状況に陥った時、まずなすべきことは何でしょうか？

自分の立場や権力を保持したり、自慢したりするのではなく、【主】に祈り、神様の導きを受けることこそ私達がすべきことなのです。

シェブナはイスラエルの宮廷長官の立場でありながら、【主】を見上げることもせず、ただただ自分の権勢だけを誇るような生き方をしていました。19節にあるように彼はその立場から追放され、その地位から引き下ろされる事になってしまったのです。

私達は霊的な目を覚まして、まずは【主】に祈り、【主】の導きを求めるようにしているでしょうか。今年は、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」という御言葉が与えられています。この御言葉にしたがって、いつも【主】を見上げて喜び、祈り、感謝していきましょう。

### ★模範エルヤキム

次にシェブヤのかわりに宮廷長官として任命されたエルヤキムの事を見ていきましょう。まずは20節をよみます

**22:20** その日、わたしはわたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、

ここで神様はエルヤキムのことを「わたしのしもべ」と言われています。聖書の中で個人を指して「わたしのしもべ」と神様からいわれたのは、アブラハムやモーセ、ヨシュアと一緒に【主】を信じて従おうとしたカレブ、そして、ダビデやヨブなどです。基本的に神様から「わたしのしもべ」と言われる人は、【主】を信じ、【主】に従うことを第一とした人です。ですから、おそらくエルヤキムも、【主】に「わた

しのしもべ」といっていただけるぐらい【主】を信じ、【主】に従うことを第一にした人なのでしょう。

だからこそ、神様は彼に大きな権威を与えられました。21節を読みましょう。

**22:21** 彼にあなたの長服を着せ、彼にあなたの飾り帯を締め、彼の手にあなたの権威を委ねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。

ここに登場する長服や飾帯などは、権威の象徴であり、「エルサレムの住民とユダの家の父」というのは、エルヤキムがエルサレムのお父さんのように彼らを保護する存在になることを意味しています。エルヤキムはその信仰のゆえに、まるで王様かのような大きな権威を神様から与えられたのでした。注目していただきたいのは22節です。

**22:22** わたしはまた、彼の肩にダビデの家の鍵を置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。

ここで神様はエルヤキムに「ダビデの家の鍵」というものを委ねています。この「ダビデの家の鍵」とは、【主】の都に誰が入れて、誰が入れないのかをコントロールすることができる鍵です。これは究極的には、イエス様が持つておられる神の国の鍵のことをさしています。黙示録3章7節を読んでみましょう。

**3:7** また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くと、だれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる――

フィラデルフィアの教会は黙示録に登場する7つの教会の中で唯一ほめられた教会で、【主】はこの教会のために「ダビデの鍵」を使い、神の国の門を開いて置くと言われていました。黙示録3章の8節、10節をお読みください。

**3:8** わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

**3:10** あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試

みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

フィラデルフィアの教会は【主】のことばをまもり、【主】の名をこばまず、迫害の中でも、忍耐し続けて信仰を守り通していたので、【主】は「ダビデの鍵」を使って神の国の門を開け、彼らを世の終わりの時に守るようにされたのです。

恐らくエルヤキムが【主】に召されたのも、そして、ダビデの家の鍵が彼の上に置かれたのも同じような理由でしょう。アッシリアが攻めてくるという危機的状況があって、同僚のシェブナは立派なお墓を作ってこの世の栄光を誇ろうとしていたり、エルサレムの人たちはこの世の快樂に目を向けて現実逃避をしようとしているなか、エルヤキムは【主】のみことばを守り、【主】の名を拒まず、信仰による忍耐を続けたのです。だからこそ、【主】はエルヤキムを、エルサレムを支える杭として用いることをお決めになりました。23節を読みましょう。

**22:23** わたしは彼を杭として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。

イスラエルを支える杭として用いられるということは、エルヤキムにとっても、これほど名誉なことはなかったと思います。それはとつても大きな働きですが、エルヤキムはその信仰のゆえに杭としてのおおきな働きを神様から委ねられたのです。

私達が「【主】のしもべ」として忠実にいきるとき、この世の栄光やこの世の快樂に目を向けるのではなく、みことばを守り行い、【主】の名によって歩み、どんなときも忍耐強く信仰を持って生きる時、【主】は、その人に教会全体を支えさせるような大きな立場をお与えになるのです。

### ★注意点

しかし、一つ注意すべきことは、【主】に従い、【主】から大きな責任を与えられたとしても、その力は永遠には続かないということです。

【主】に忠実なしもべが、【主】に仕え、正しく従い続けていけば行くほど、人々は【主】ではなく、その人によりかかるようになってしまいます。24節を読んでみましょう。

**22:24** 彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢からすべての壺に至るまで。

彼というのはエルヤキムのことですね。エルヤキムは、子や孫だけでなく、鉢や壺にいたるまで、全ての存在に頼られるようになったのです。これはエルヤキムの立場が非常に大きくなったことを表しているのと同時に、この世の人々が、今度は地上の武器ではなく、エルヤキムにより頼むようになったことを意味しています。

そして、そのようにして人々が、エルヤキムに寄りかかったらどうなるでしょうか？25節を読みましょう。

**22:25** その日——万軍の【主】のことば——確かな場所に打ち込まれた杭は抜き取られ、折られて落ち、その上にかかっていた荷も取り壊される。——【主】はそう語られた。』

「その日」というのは、【主】のさばきの日ですね。バビロンがエルサレムを滅ぼす時でも、アッシリアがエルサレムを占領するときでもなく、【主】の裁きのときには、どんなに素晴らしい【主】のしもべであったとしても、人々がよりかかった杭は、抜かれてしまい、折られてしまうのです。そして、人々は神の国ではなく、この世に取り残されてしまいます。だから、私達は決して折れることのない杭、イエスキリストにより頼むしかないので、

みなさん、どんなに素晴らしい信仰者であったとしても、人に頼ってはその杭はいずれ折れてしまいます。だからこそ、私達は人に依存するような信仰を持つてはいけないのです。

エルヤキムの【主】のしもべとしての生き方は私達の模範になるものです。しかし、彼のような素晴らしい存在であったとしても、尊敬している先生や、信仰の先輩であったとしても、その人に頼るなら、やがてその杭は抜け、折れてしまいます。だから、決して折れることのないイエスキリストという杭により頼むのが、永遠の平安に通じる道なのです。

シェブナのようにこの世の権威を誇るのではなく、エルヤキムのように厳しい状況でも忠実に【主】に従いつつ、【主】イエスキリストにより頼んで歩む者となっていきましょう。